

「西アフリカ食糧安全保障」セミナーに出席して(調査員レポート)

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1989-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008680

「西アフリカ

原口武彦



食糧安全保障」

セミナー
に出席して

ブランテン・バナナを調理する女性

筆者が現在、客員研究員として籍をおいている CIRES (Centre Ivoirien de Recherche Economiques et Sociales, コートジボワール国立大学附属社会経済研究センター)と、CRDI (Centre de Recherche pour le Développement International, カナダ国際開発研究センター)との共催で、「西アフリカにおける食糧安全保障——その現状と展望——」と題する国際ワークショップが、1989年6月5日から4日間、ここアビジャン市で開催された。以下は、このワークショップにオブザーバーとして出席した筆者の印象記である。

このワークショップはCIRESとカナダのCRDIとの共催とうたわれていたが、諸外国(ブルキナファソ、ベニン、セネガル、カナダ、フランスの5カ国)からこのワークショップに参集した10名の研究者の旅費、滞在費など金銭的には全面的にCRDI側の負担で行なわれた、実質的にはカナダの研究協力プロジェクトの一つであった。CRDIが1985年から発足させたこの研究協力プロジェクトは、アフリカ諸国の各種研究機関が刊行している社会科学系学術誌のなかから、3誌(タンザニアのダルエスサラーム大学が発行している *Taamuli*、セネガルのダカール大学歴史学部の *Société, Espace, Temps*・コートジボワールのCIRESの機関誌 *Cahiers Ivoirienne de Recherches Economiques et Sociales*)を選定し、その編集担当者をカナダに招き、6カ月にわたって、編集作業に適しているといわれるワープロの操作方法などの研修を行ない、これら研究誌の活性化、充実に貢献しようというもので、研究協力プロジ

ェクトとしてはきわめてユニークな試みである。すでにタンザニアの *Taamuli* 誌の編集担当者のカナダ研修は終了し、現在はセネガルの上記誌編集担当者、デイウフ (Diouf) 氏が研修中(このワークショップにも参加)であり、今秋からはCIRESのバリー (M. B. Barry) 氏が、カナダに招かれることになっている。バリー氏はこの研修期間に、実際にCIRESの機関誌の特集号編集作業を行なうことになっており、その特集号のタイトルが「西アフリカの食糧安全保障……」である。この特集のために内外の研究者に依頼して送られてきた原稿の検討を行なうことが、このワークショップの目的であった。したがってこのワークショップにまねかれた研究者は主にそれらの原稿の執筆者であり、そのほかにはCRDIが学術誌編集実験者として派遣したジュウスウィツキー (Jewsiewicki, ラバル大学)、ストレン (Stren, トロント大学) 両教授 (いずれも、カナダのアフリカ研究専門誌 *Rvue Canadienne des Études Africaines* の編集委員)、長年、コートジボワール国立大学の出版業務を担当し、フランス帰国後は独立して契約ベースで各種の研究プロジェクトに参加しているセザリ (B. Césari) 氏、前述のカナダ研修中のセネガルのデイウフ氏であった。さらにオブザーバーとして筆者を含めCIRESの研究者が数人加わり、4日間にわたり11の論文が共同討議の狙上のにせられた。

以下はそれら11の論文のタイトルと執筆者名である。

- (1) Zoungrana, P. (コートジボワール国立大学

経済学部)「食糧安全保障の問題——アフリカの食糧戦略について考慮すべき諸要素——」

- (2) Ouedraogo, M-M. (ワガドゥグ大学)「サヘルの一都市の食慣習変化・食糧需要・食糧戦略——ワガドゥグ——」
- (3) Médjomo, C. (CIRES)「飢餓の終焉——精神の賭け、社会の賭け——」
- (4) Camara, T. (セネガル計画・協力省)「西アフリカの飢餓——過去と現在——セネガルの事例」
- (5) Sene, A. (ダカル大学環境研究所)「セネガルの漁業の発展と食糧安全保障」
- (6) Hachimou, T. (ベニン大学科学技術研究センター)「ベニンの農業生産と食糧自給」
- (7) Perrault, P.T. (CIRE, Winrock基金, カナダ)「コートジボワールの食糧安全保障——一つの試算——」
- (8) Zerbo, S. (ブルキナファソ計画省)「ブルキナファソの食糧安全保障」
- (9) Pantobe, D. (CIRES)「コートジボワールの植物性食糧の消費に対する人口増加の影響」
- (10) Barry, M.B. (CIRES)「アフリカの食糧不安——だれの過ちか?——」
- (11) Bouttillier (ORSTOM, フランス)「飛び地状態のNassian地方(コートジボワール)のクラング族の生産システム (1960年代末)」

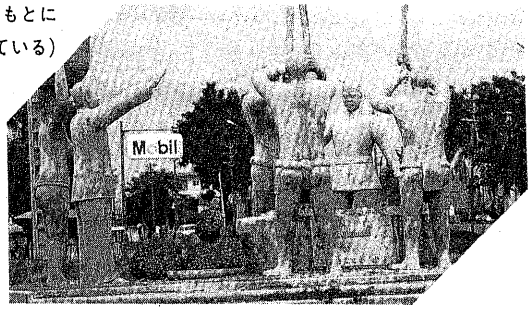
会議のすすめ方は、まず上記の論文の執筆者が自分の論文の主旨を約20分間、口答で説明したのち、あらかじめ出席者のなかから選ばれた2人のコメンテーターが、1人はその論文の内容を中心に、もう1人はその様式上の問題について、それぞれ批判的な論評をくわえ、そのあと出席者全員による討議に入るという方式であった。

CIRESの機関誌に掲載予定の論文の検討ということで、雑誌編集の立場からその論文の様式上の

問題についても、1人のコメンテーターをたてて論評させるという点で、このワークショップのすすめ方はユニークであり、印象深かった。一応、研究者としての地位を確立している人が執筆した論文について、その執筆者を前にして、それこそよってたかって様式上のあらさがしをするさまは、壮観でさえあった。ページ数がぬけている、注のつけ方がおかしい、引用文献の記載方式が不統一である。イタリック文字、アンダーライン、セミ・コロンの使い方が慣用に反する、あるいは不統一である、文中の表に番号とタイトルが付されていない、論文のタイトルが内容にふさわしくない、章別構成がバランスを欠いている、さらにはこのいいまわしはフランス語の慣用に反する、などなど、ある意味では重箱の隅をつつつくような指摘が続出した。それらのあるものは、執筆者の憤激を買うのではと、はた目にもはらはらしながら聞いていたが、「様式上のコメント」という枠が与えられているからか、少なくとも表面上は感情的な気まずさを生じることなく討議は進行した。そして丁丁発止のやりとりのうちに、おそらくほとんど初対面なはずの出席者たちの間に、同じ目的の作業に従事しているという共感が生みだされていくようであった。またきわめて精緻なコメントを行なった人が、自分の論文の番になるとやはり同じようにミスを指摘されているのは、岡目八目ということか、ほほえましくさえあった。

内容に関するコメント・議論についていえば、ここで逐一その内容を紹介するいとまはないが、まず何とんでも、「西アフリカにおける食糧安全保障」という問題が、その現場の当事者間で討議されているという臨場感といったものが、会場にみなぎり印象的であった。たとえば、ブルキナファソの深刻な状況を紹介した二つの論文((2),(8)、いずれも執筆者は女性研究者であった)は、1973年の

1946年の強制労働廃止の記念碑。植民地兵の監視のもとに
労働する農民と、ウフェ・ボワニ大統領(手を上げている)



大旱魃以来の同国の食糧問題の抜きさしならぬ状況を、これまで整備されていない不完全な統計資料をもって紹介したものであり、とくに目新しい問題提起は含まれていなかった(その点、コメントでも指摘されていた)が、現場からの証言としてそれなりの説得力をもっていた。

また、「食糧安全保障」という課題に対して各国の研究者の提示した論文には、その地域の特色が反映していた。セネガルのセネ氏の論文(5)は、同国の長い海岸線(500km)を利した沿海漁業の開発をセネガルの食糧戦略としてさらに重視すべきだと説いていた。ベニンのハシム氏の論文(6)は、ニジェール、ナイジェリアと国境を接する同国の北部地域は、国境をこえた食糧流通によって、その食糧需給バランスが保障されている現状を紹介し、地政学的要素を無視して画定された国境という植民地遺産が、ベニン国内の食糧自給という政策目標の設定を無意味にしていると論じた。植民地国境を前提とした国内の食糧自給という政策目標は、ときにはその地域の食糧安全保障を脅かしかねないという同氏のベニンの現実をふまえての指摘は、出席者に食糧自給すなわち食糧安全保障という図式を再考させ、このワークショップの大きな論点の一つとなった。その点でブティエ氏の論文(11)も、食糧自給という政策目標の意義を再考させるものであった。コートジボワールの東北部、ナシアン地方の食糧生産システムの調査報告であるこの論文は、この地域がかつては、遠距離交易の通商路に位置し、人、物の往来を通じて、食糧供給が保障されていたのに、植民地化以降、遠距離交易が衰退しこの地域は孤立し、地域的な食糧自給を余儀なくされることによって食糧供給はおびやかされることになったという、一つの地域史の紹介であった。

ほとんどの論文が、いずれも自分の国の状況と

のかかわりで、「食糧安全保障」の問題を論じていたなかで、この特集の編集責任者でもあるバリー氏の論文(10)は、その立場もあってか、この問題を総論的に扱っており他の諸論文とは異質であった。やや煽動的な副題を付したこの論文は、今日の西アフリカの食糧不安という事態の現出に責任のある要素として(植民地化の)歴史、独立後の地元エリート、世界情勢、自然的条件、の四つをあげ、雄弁にそれらを告発するものであった。彼の20分間の主旨説明もきわめて雄弁であった。雄弁で詩的でさえあり、最後には21世紀はアフリカの時代といったような気分にかけてくれたが、おちついて論文を検討してみると、とくに斬新な指摘があるわけではなく、むしろその雄弁さである種の雰囲気をつくりだすといった性質の論文であった。

しかし、私は植民地化の歴史を断罪するバリー氏の雄弁に耳を傾けながら、何かおかしいと感じていた。私の疑問を解消してくれたのは、セネガルの若いセネ氏の発言であった。彼は「バリー氏の断罪にはわれわれにとって重要な一視角が欠如している。それはアフリカ人が植民地化されたという責任の追及だ」と批判したのである。植民地化の歴史がどのようにいまわしいものであろうと、アフリカ人がその歴史から何かを学びとろうとしたら、その歴史は自分たちが植民地化された歴史として主体的に受けとめられなければならないはずである。それは従来そうであったように、植民地化したものの歴史にすりかえることはできない。「なぜ、われわれは植民地化されてしまったのか」という問いこそが、植民地化の歴史を検討するときの基本的な視角になるはずである。アフリカ人にとってははっとも重要であるとおもわれるこの

視角を欠いて植民地化した側の過去の反省としての語り口を踏襲するバリー氏に対するセネ氏の批判は痛烈であった。私はアフリカの新しい知性の萌芽をここにみたような気がした。

同様に、セネガルのカマラ氏(4)がカザマンズ地方の米作地帯の伝統的農法が、いかに自然の摂理にかなったものであり、植民地化がもちこんだトラクターによる深耕がセネガルの土壌をどれほど破壊してしまったことかと、ある意味ではこころよさそうに慨嘆してみせたとき、コートジボワールのメジヨモ氏(3)は「わが農民の革新性にそれほど無条件の信頼をおくことができるであろうか」と反論していたことも、同様な意味で私にはとても新鮮であった。

西アフリカの食糧安全保障問題の深刻な現状を反映して、連日、白熱した議論がくりひろげられたこのワークショップも、4日間の日程を無事おわり、最終日の夕刻にはこの国の科学研究省の研究計画局長の臨席のもとに、閉会式とお別れカクテル・パーティが行なわれた。アビジャンの大雨季の名物、ものすごい雷鳴のとどろくなか、その雷鳴と雨音をものともせず、一つの仕事を一緒にやりとげたという連帯感と解放感もあって、参会者の話し声はずんでいた。

このワークショップに参加して唯一残念だったことは、CIRESの研究者が一部の関係者を除いてこの国際ワークショップに無関心で、顔もみせなかったことである。おそらく、それぞれが自分のプロジェクトや大学での講義をかかえ、時間的余裕がなかったのかもしれないが、カナダからさしのべられた一つの研究協力プロジェクトに対して、CIRESが組織としてもうひとつ対応できていない

このためではなかったろうか。自己資金がかぎられているCIRESのような研究機関では、どうしても世銀をはじめとする国際機関や欧米各国の委託研究や研究協力プロジェクトにその活動を依存せざるをえない。そして、その各プロジェクトごとにCIRESのわずか30人たらずの研究者は分断されてしまい、CIRESとしての一体性が解体されてしまう。この傾向は近年ますます強くなっているような気がする。さまざまな国際セミナーの招待で、CIRESの研究者たちは、諸外国をまさに飛びまわっている。しかし、彼らの活動・経験がCIRESの共有財産として蓄積されているかという点では、はなはだ疑問である。季刊であるはずのCIRESの機関誌は1984年以降、87年と88年にそれぞれ1号ずつ、わずか2号の発行にとどまっていることが、それを象徴している。この国の食糧安全保障の問題に比すべき状況が、CIRESという知的生産の場にも存在している。逆にいえば、このCIRESという場においてさまざまな諸外国からの研究協力がひきおこす諸問題を認識・分析することによって、西アフリカが当面している食糧安全保障問題の解明のヒントもえられるのではなからうか。CIRESが自立した知的生産機関として蘇生するのは、どのような過程を経て、いつのこととなるのだろうか。そのために今回のカナダがさしのべた研究協力の手は、どのような意味をもっているのだろうか。バリー氏は、まもなくカナダに旅立つ。ワープロの習得は、食糧生産でいえばさしずめ農業機械の操作技術の研修ということにならうか。彼が習得した技術が、CIRESの機関誌の再興に貢献できることを願うのみである。

(はらぐち・たけひこ/在アビジャン海外調査員)